

■■ 農家と猫 ■■

I

この慌しい時世にこともあろうに猫などと、あまりに呑気に過ぎるとお叱りを受けるかも知れない。その一方ではまた、ははあ寅年にこじつけたかと、好意の解釈もなかったとは予断されぬが、じつは私自身も、この題目は少なからず気にしているが、適当なものが見つからないのである。

去年の秋にある雑誌に、これも呑気な表題で「猫を繞る問題一、二」という、極めてぎこちない一文を送ったところ、方々から猫について教示を受けた。それと同時に、前々から諸方に問い合わせた回答もぼつぼつ集まって来て、農家と猫の問題に少なからず自信を持つに至ったので、この際いささか横着な量見を起こして奥南新報の愛読者の方に私の疑問を訴えて、教えて頂こうと思立ったのである。

私が猫のことを折り入って考えてみようとした一つの動機は、実は昨年春、八戸市とはあまり遠くない、岩手県九戸郡の宇部村を訪れた時、あそこの久世丑次郎さんからいろいろの村の話をついた。

その折、話のついでに聞いたところによると、あの辺では家畜の類、ことに四足の動物に対する愛称はキジで、また呼ぶ場合はキジコイキジコイなどという。

東海地方の山の中に育った私に、キジという言葉から第一番に促される連想は猫のことである。キジネコともいい、だんだらの斑毛を持ったもので、東北では一般にトラネコ、アグネゴなどというものである。もちろん鳥の雉も考えられぬではないが、四足の獣から引き出されたことだけに、猫のキジを真先に連想したのである。何で馬や牛や、または犬猫をキジなどと呼んだらうと、じつは子供みたいなはかない疑問を抱いたのが、あの猫をめぐる問題の一つの発端であった。

II

これもキジの語に対する疑問が機縁となって知ったのであるが、旧日本の国土では、どういふものか西半分、もちっと細かにいうと東京を中心とした関東あたりまでは、あのだんだらの斑毛の猫をキジの名で呼ぶが、それから東ではとんと聞かない。ずいぶん村のことに明るい人でも、そういう名は聞いたことがないと一様に答えられる。これもまた注意すべき現象であって、相手が家の中に多く住んで、あまり人目につくのを好まぬ性質と、もう一つは当今の生活様式には、大した関係がないために、言葉としての普及がまだ至らなかったとすれば、それもまた一つ問題である。

家畜を主として、四足の獣を呼ぶ言葉と、猫のあるものにいう名と、同じであることの

疑問を頭に描いて、キジの語をもつものをざっと辿ってみると、九州地方でイガ栗頭の段々刈りにしたのをキジまたはキジガリなどという。ところが私の郷里の三河等では、そういう形容を多くゲジという。

ゲジアタマ、ゲジゲジといって、私などの小学校時代には、土地が辺鄙で理髪屋に遠く、家人が缺で刈ったりしたので、このゲジアタマが常に友人の中にいたものである。あるいはこの頭を形容してゲジに喰われた、または舐められたようだとも言った。ゲジはいわゆるゲジゲジ（蝸蜒）で、これを源氏の連想からか、それとも嫌われもの、つむじ曲がりの性格に共通点を求めてか、こともあろうに源家の武将の名を、そのままに、カジワラとも言った。

九州地方でいうキジガリ頭が、猫の名と同じであったことは、そこから受ける感覚によったと思われるが、さらにそれは、三河においてゲジゲジの語として関連があった。そうしてキジの語は家畜としての動物の名でもあった。それこれ思い合わせると、あるいは琉球でいうキジムン、キジマムンとも結びつくかも知れない。マムンは魔物というほどの意で、一種の精のことでもあるらしい。

かように辿ってゆくと、何年飼い馴らしても、一向に肚の底が知れない猫の称にその名があったことも、偶然でない気もする。が、しかしあのだんだら斑の毛並みに限って、何故にそれを言ったかの理由にはまだ全く触れぬのである。

しかしこの問題の解決は、この程度の事例だけではどうにもならぬ上に、単に言語の上だけで言ってみても始まらぬ。もっともっと一般の猫はもちろん他の動物について、われわれの祖先が抱いていた気持ちにまで詮索する必要がある。それには第一、猫という動物が今日まで養われて来た理由等も、知らねばならぬ。ただ鼠を捕るというだけが、この小動物を飼育した目的の全部ではあるまい。今のうちなら、交通不便な山村等には、たいてい家庭に飼われているが、ネコイラズなどという強敵が現れて、当の鼠以上にその運命は危殆に晒されていたことを思うと、何となく急き立てられるようでもある。

Ⅲ

今でも農村ではよくいう言葉だが、猫の子まで数えるとか、猫も三文などと家族人員に譬える風があって、家族の一員としての猫は、時によっては牛馬や犬または鶏以上の地位を占めていた。これも前に猫に関する問題の一つとして取り扱ったのが、猫は家畜の一種であるが、鼠を捕る以外には人間にあまり貢献がないのに、どんな家庭にも、ほとんど貧富を超越して飼われていた。これには飼料の問題も大いに関係があって、犬などとちがって躰が小さいだけに大したことはない。時たま食物を与えるのを忘れていても、どこかし

らで、食欲を満たしていた。ホイト猫、ジャミ猫、ドラ猫などと、格別に罵ってもみたが、どんな御大家に飼われていても、家から給与されるものだけで満足しない。この点、茶呑茶碗一つにも事欠くような貧しいヤモメ婆さんに飼われていた猫もまた同じである。鼠を捕る一方には、野外へ出てバツタやトカゲを追い廻している。従ってその野獸的生活の条件は、犬などより遥かに有利で、それだけにまた恩知らず、主人に仇を為す等と常に警戒を受けている。〔これを要するに、猫の生活を見ていると、まだ仔猫のことは家畜として、人間の庇護を絶対に必要とするのだが、年が長くなるにつれて次第に野獸的本能を發揮してくる。つまり人間の庇護を必要としなくなるので、ここにあの小動物が恩知らずだの、主人に仇をするなどのそしりを受けた理由がある。〕つまりその生活は野獸と、家畜との、両面をあわせていたのである。

しかし、左様に信頼の置けぬ存在にありながら、どこまでも家庭の一員として取り扱われたのも不思議である。その理由の一つは、炉辺における座席である。座席というといささか語弊があるが、例のネコエジコ（エズメ、エンジコ等）のことである。これもだんだん取り片づけられて、私などにはめったに見る機会がなくなったが、それでも農家の炉辺には、まだ置かれてあるものが尠くない。昨年秋田県雄勝郡の山村を訪れたとき、その農家の炉辺にあるのを懐かしく見た。越後などでもこのねこのための揺籃はあって、これは土地柄からネコツグラという。藁で編んだことは秋田県等と同じで、中頸城郡等では、ここ四、五〇年前までは、たいていの農家に嬰兒を容れるツグラとともに一つは備えてあったという。

ネコエジコ、ネコツグラは、畢竟一般の猫箱を一倍原始化したものである。従って猫箱の分布圏も思いのほか汎い。東は青森県西津軽辺にもあるが、関東東北地方から、遥かに九州にまでおよんでいる。東海地方の例は別に言ったから繰り返さぬが、宮崎県、大分県等でもネコバコと言っている。宮崎県椎葉村（西臼杵郡）地方のものは、横一尺二寸、高さ一尺弱、奥行八寸ほどの長方形の箱で、中に古綿など入れるという。現在村内になお六個か七個使用されていると、これは同地の黒木盛衛さんからの報告である。

島根県那賀郡の山村ではネコバコともいうが、今ではわざわざ箱など作ることはなく、多くハイモチに入れて置くという。ハイモチは藁製の一種の籃であった。そうして猫が寒がりやのせいもあるが、一様に囲炉裏の傍に置かれていた。

こうした猫の家に対して、富山県高岡市を中心とする農村には、ネコツナギという特別の工夫を凝らした綱が、炉辺に近い柱などに結びつけてある。知らないものには子供の遊び業とも早合点しそうだが、これがじつは家の門口における犬の如く、炉辺を中心にした

猫の座席を示すものであった。改まった来客でもあるか、家に振舞いごとでもある際には、まずこの綱に猫を繋ぐ。当面の目的は、饗応の料理などを侵させぬためであるが、ただそれだけとも言えなかった。

これについて、最近ある家を訪うてたまたま談がそのことに及んだとき、そこの主人から抗議が提出された。その理由は猫箱、ネコエジコには、わざわざ綿や衣類の古などを敷いているから、これは一種の優遇である。しかるに来客または、振舞いの際、御馳走の料理警戒のために繋ぐことは、これは明らかに拘束を意味する虐待で、この正反対のことを混同して、猫の席などと言うことは怪しからぬというのである。まことにもっともなる抗議ではあるが、しかしその綱を繋ぐことは、所定の位置につかしめると解すれば、猫としてはけだし光栄の綱で、神聖な社殿に繋がれた神馬の地位はまた、かならずしも監禁ではなかったと、そういう弁明も一応は成立するように思う。

IV

私一個の考えとしては、前のような解釈を下すのに、少しばかり根拠がないではない。秋田県東成瀬（雄勝郡）の山村などでは、猫が鶏などを取って困るときの処置として、その頸に小さな板札を結び下げる（菊池慶治氏報）。恰好はちょっと東京などの迷子札である。もちろんこの習俗の理由については未だ明言されぬが、おそらく人間の子供に、晴衣を着せるような意図がひそんでいたように思う。これから考えると、猫の頸に鈴を下げたりまたは小布を結んだ動機にも、一脈の通うものが考えられる。

同じ地方で子猫を他から連れて来る時、〔小豆や大豆を代物とする風も興味深い、それと共に籠や〕コダシ等に容れて視界を塞ぐことは、どこも共通であるらしい。そうして家に到着すると、第一番に摺鉢に伏せ、その上に炭火を載せる。はじめにかくすると猫が長くいつくというのも、所在に定まらぬ猫にやりそうなことだが、これも猫を俟って考案されたものではないであろう。

その他猫と農家の関係を語るものは、台所の板敷きの隅などに、例の猫椀が置かれてあったことである。猫の食器を東北地方の農村では多く猫のワン、猫のゴキなどという。長崎県の壱岐の島などでは猫ヅキともっぱらだったが、三河や信濃の山村では、犬の食器に犬ヅキの名が行われていたことに併せ興味がある。

猫と農家の関係を語るものとしては、夜分戸を閉め切ったときのために、猫の出入口が障子などにわざわざ設けてあることである。スダレなどのように、障子の棧の一間に、美しく紙を切り抜いて置いたりする。秋田で猫ムグリなどといったが、これなどには、夏分家人の留守の間、燕の出入をさまたげぬために、大戸にわざわざ小さな口を作ったものと

ともに、わが国農家の持つ特殊の状景で、同時にそれら小動物に対する村の人々のなつかしい心やりを思うものである。動物愛護などと、まるで自分たちの専売のように叫ぶ都会のインテリ衆に、これだけの寛大と思いやりがあったであろうか。

V

前に言ったキジネコ、東北地方でもっぱらトラネコ、アグネコなどというものを、土地によってヨモギネコという。〔ヨモはやはり怪物、魔性を意味しており、さつまなどでは、ヨモはもっぱら猿の名である。そうしてヨモザイなどともいう。〕もっともヨモギは毛並みがキジとはまた別だというのが、土地ごとに説明が区々だからほぼ同じものと見てよいと思う。ヨモギネコをいう地域は、調べればさらに拡大すると思うが、ただいま私の知る範囲では、東北の青森県から京都府の北辺まで及んでいる。どうしてかような名称が生まれたか、一部分考えてみたこともあったが、頗る心許ない。富山県や岐阜県の山村では、毛並みが蓬に似ているからだという。

それを解くには、もちっと農家と猫の関係を調べた上でないといえないことだが、猫を飼う一つの目的に、これを冬分寒い時、こっそりと抱いて寝る。今日のいわゆる懐炉または炬燵に利用した、そこを一つの観点にする時、辿るべき道があるように思う。もっともそれには、わが国における夜着または蒲団の歴史にも関係があるから、その方からも考えねばならない。しかしそれだけではまだ、特殊の毛並みに限って、その名があったことの説明にはふらないから、その考証は一段と慎重を要するわけである。

前に猫の問題を書いた時にも、壱岐の山口麻太郎さんから注意されたが、あの地方には、ユネコという言葉があり、すなわち湯猫で生きた湯タンポの意でもある。東京などで置炬燵の一種にネコの名があったことは、その器の恰好が猫箱に似ていたことから、あるいは関係があるのだと思っていたが、その一方に、猫を直接に利用したことも、一応考えて置くべきであった。

猫と農家などと、今さら馬鹿馬鹿しくかつ呑気極まる感はついに去らぬが、農家ことに農民生活の沿革を知る上には、こういう部門も等閑にするわけにはゆかなかった。幸いに奥南新報の読者の中に、多少ともこの問題に関心を持たれて、お教えを受けることが出来れば、私のこの悪文の目的は大半達せられることになる。いささか手前勝手に過ぎた点は、お詫びしておきたい。